

ドストエフスキイ研究会便り（25）

★『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフ。この青年は人類の歴史を顧みて、そこを支配するのはごく少数の「ナポレオン」たちであり、他の圧倒的多数の人間は「ナポレオン」たちの暴力と恣意によって消費される「素材」でしかないという結論に至ります。では、自分は「ナポレオン」なのか、「虱」でしかないのか？ この問いへの答えを求めて、彼は金貸しの老婆を殺害してしまいます。しかし彼が得たのは、自分は「虱」だという自覚でしかありませんでした。「罪」に対する懼るべき「罰」の到来です。

★ナポレオンのモスクワ侵攻(1812)から約半世紀後。この「事件」とは何であったのか？ 「ナポレオン」とは何であったのか？—— これらの問題に関する思索の結晶を、ロシア文学は二つ産んだと言われます。トルストイの『戦争と平和』(1863-69)と、ドストエフスキイの『罪と罰』(1866)です(メレシコフスキイ『トルストイとドストエフスキイ』1902)。我々はこれらの作品から、日本の明治維新前後、ロシアの偉大な文学者二人が、「ナポレオン」という存在を向こうに置き、人間と世界とその歴史、更には超越世界について如何なる思索を展開していたのか、詳細に知らされます。ラスコーリニコフの「ナポレオン理論」もまた、その結晶の一つと考えられます。

★『罪と罰』と言えど誰もがまず思い浮かべるのは、この「ナポレオン理論」に憑かれ、思想殺人に走るラスコーリニコフと、彼を地獄から救い出す娼婦ソーニャでしょう。しかしこの作品の内には、主人公が老婆殺しに踏み込み、その後ソーニャと出会う前、ナターリヤという下宿の娘と二年間にわたる婚約生活を送っていた事実が描き込まれています。小説の各所に散在する情報を丁寧に集めてゆくと、ナターリヤが早過ぎる死を迎えるまでの二年間、二人が送った婚約生活の内実が浮き彫りにされ、この作品が思いも掛けなかった新しい相貌を示す可能性も生じて来るのです。

★前回は『罪と罰』からナターリヤに関する情報を集めて整理し、考察を加えました。今回はこれらの情報を、ナターリヤの母ザルニーツィナ婦人の下で働く召使のナスターシャに託し、彼女が二人の回想を語るという設定の下で、改めて考察を試みます。

《創作》と銘打ちましたが、飽く迄も与えられた情報を基に、彼女がバランスよく物語ることで、若い二人の二年間にわたる婚約生活とその持つ意味が相当明確にされ、ここからは「ナポレオン理論」に新しい光が当たるばかりか、「天使」ソーニャに先立つ、隠れた「市井の女神」ナターリヤの姿も浮かび上がって来るように思われます。

皆さんも改めてナスターシャの話に耳を傾け、ラスコーリニコフとナターリヤが見た二年間の「春の夢」に、様々に想いを馳せて頂ければと思います。

《創作》異聞・『罪と罰』

— 召使ナスターシャの回想 —

芦川 進一

目次	ページ
A. はじめに	3
B. 上京と下宿	3
C. 婚約	4
D. 一本の「棘」、修道院	6
E. 「おとぎの国」	6
F. 狂い始めた歯車	8
G. 悪魔風	8
H. 吉報	9
I. 隠されていたこと	10
J. 「棘」、貧しき人々	11
K. 「善きサマリア人」	14
L. 闇に光る「灯」	14
M. 再生、もう一つの「灯」	15
『罪と罰論』に至る様々なデッサン	17
次回の「ドストエフスキ研究会便り」について	18

★本論は、私が『罪と罰』論(河合文化教育研究所、2007)を準備している10年近くの間、様々な角度から試みた試行(思考)錯誤・デッサンの一つです。これらのデッサンについては、前々回の「ドストエフスキ研究会便り(23)」の巻末「関係する論考」と、前回の「ドストエフスキ研究会便り(24)」に於いても、「目次」の後に一部記しましたが、改めて本論の後に纏めておきます。

《創作》

異聞・『罪と罰』

— 召使ナスターシャの回想 —

A. はじめに

同じ屋根の下に、召使と下宿人という立場の違いこそあれ、三年も暮らしていたラスコーリニコフさん、その心の奥深くには誰にも負けない優しい心根(こころね)を秘めていた学生さん、そして天使のようなお嬢様の婚約者であったあの人が、お嬢様の死から一年して、とうとうあんな恐ろしい殺人事件を引き起こし、私と同じ召使仲間の内でもみんなから愛されていた、信心深いリザベータの頭まで叩き割ってしまいました。このペテルブルクの街では、人の心に宿る罪の深さもここまで恐ろしく残酷なものとなり得るのでしょうか。あの人が警察に自首してから一カ月、私は何度人間への不信感と恐怖感、そして悲しみに捉われ、心が乱れ狂わんばかりとなったことでしょう。一年前にお亡くなりになったお嬢様は生前からもう、この儂い世を一刻も早く捨てて修道院に入ることばかり夢見ているお方でした。この事件を知ってからは私も、修道院へなり田舎へなりと、この世の外ならばどこへでも行ってしまいたい、否むしろお嬢様のお導きでいっそ神様のもとへ召していただき、この魂に永遠の安らぎを与えていただきたいという気持ちに駆られることも少なくありませんでした。しかしそれもかなわぬこと。いま私に出来ますこととはと言えば、予審判事のポルフィーリイ様のお勧めに従い、ラズーミヒンさんを相手に何回かにわたって、これまで私が見たり聞いたり、そして感じたことを、出来るだけ正直にお話し申し上げること、そしてそれを皇帝様のお裁きの場と共に、天なる神様の前にも差し出していただき、私を含めて今度の恐ろしい事件に関係した方々すべてへの、そしてこの恐ろしいペテルブルクに住む不幸な人々すべてへの、公平なお裁きと御慈悲とを切にお望み申し上げるしかないとの心境でございます。この困惑の闇の中からも、何か一条の光が私の心に射し始めることを願いつつ、お話し申し上げます。

B. 上京と下宿

ラスコーリニコフさんが上京されたのは、三年前のことでした。大学からの下宿斡旋の紹介状を持って、あの人は颯爽と戸口に立っていました。旦那様の亡き後うちの奥様は、ささやかながら残された資産と年金とでお暮しになっており、生活に困るようなことはなかったのですが、病弱なお嬢様を抱え、召使の私も女ということもあって、イザという時のために身元の確かな学生さんあたりを一人、下宿人として置いておこ

うと思ひ立たれたのです。そして間もなく現われたのが、法学部に入学したばかりのラスコーリニコフさんでした。ペテルブルク大学の、それも法学部というところは、国家の将来を担う輝かしい経歴を約束された秀才たちがひしめく学部だということでも有名で、奥様もとてもお喜びでした。ラスコーリニコフさんは某県の片田舎から上京してきたばかりだとはいえ、最初からとても神経質で気難しそうで、また時に如何にも気位の高そうな表情を垣間見せることもありましたが、そこは何と言っても最高学府に受け入れられ、やがては国家の枢要な地位にも就こうという方なのですから、これも当然のこととして私たちの心の内に納められたのでした。ところがいざ家で生活を始められると、あの人は人見知りの激しい方でしたが、実は礼儀正しく落ち着いた、しかも正義感がとても強い、それは好ましい青年だということが分かりました。故郷には細々と年金暮らしをするお母さんと妹さんがいるという話でしたが、なんとという美丈夫のお子さんを産んで、しかも秀才として立派に育て上げ、花の都へ送り出したものか、さぞお母さんと妹さんは鼻が高いに違いないだろう、将来も楽しみに違いないだろうと、奥様と私とは陰で語り合ったものでした。

このようにして、ラスコーリニコフさんのペテルブルクでの生活が始まりました。ところがその直後、奥様にとってはまさか思いもかけなかった事態が生じてしまいました。ラスコーリニコフさんと、うちのナターリヤお嬢様とが、たちまち結婚の約束までするという「事件」が起きてしまったのです。

C. 婚約

ナターリヤお嬢様とラスコーリニコフさんとの婚約について、私の知る限りでお話をいたします。このことが今度の殺人事件にどのように関係していったのか、私の頭では具体的に筋道をつけかねますが、私にはこの二つのことが、お二人の極端で風変わりな性格とも絡み合って、何処かで深くつながっているような気がしてなりません。

ところで奥様と今は亡きお嬢様の手前、私風情がこのような事を口にするのは憚られるのですが、これからナターリヤお嬢様についてお話を申し上げ、お嬢様のことを正しく理解していただくためには、避けるべきでない一つの事実がございます。それは、正直申し上げて、うちのナターリヤ様は決して「器量良し」のお嬢さんとは言えなかったということです。おまけにお嬢様は、生来の病弱さゆえに、床に就いておいでのことが多かったのです。皆様もご存知のあの奥様の華やかな美しさと健康と、これは何と対照的だったことでしょうか。神様は不公平なお方だと、この私でさえもが何度心の内で繰り返したことか。尤も、このような事情があるからこそ、年頃の娘のいる家に、これも若い年頃の男性の下宿人を置くという、事情を知らない人にとっては頭をかきげたくなるような選択が、奥様によってなされたのでしょうか。

ところがラスコーリニコフさんがうちに下宿なさるや、若いお二人の間にはたちどころに何か不思議な「交流」が始まりました。ラズーミヒンさんがよくお使いの言葉で言えば、「電流が走った」ということでしょうか。毎日大学から戻るや、ラスコーリニコフさんは机に向かう前、まずはナターリヤお嬢様の許に出向かずにはいません。お嬢様の体調の良い時には居間のソファで、ご病気の時にはお嬢様のベッドの傍らの椅子にあの人が陣取り、二人は熱心に何ごとか話し込んでおいででした。このラスコーリニコフさんとお嬢様とが、果たしていつの時点で結婚の約束までなされたのかは謎です。しかしそれも恐らく、一カ月と経たないうちのことだったことは確かです。お二人の言葉からは間もなく、互いが婚約者同士であること、二人はこれからの人生を永遠に共にして行くのだということが、自明のこととして響いてくるようになりました。このことに突然気づかれた時の奥様の驚きと狼狽ぶり！ それまで奥様は、ご自分がこの世を去られた後、ナターリヤお嬢様が病弱のまま、そのか弱い生命をкаろうじて細々と保ちつつ、ずっと独り者としての生活を続けてゆかれるものと思込まれていたのです。そこに突然、まさか思いもかけなかった婚約話。余りにも早すぎる事態の展開に不意を打たれた奥様は、しばらくは半狂乱のようになって、この私を相手に涙ながらにご自分の運命を嘆かれたり、ラスコーリニコフさんをののしられたり、またナターリヤお嬢様の軽率さに怒りをぶつけておいででした。しかし若い二人の熱気は冷めるところか、二人が一緒にいる機会と時間はますます多く長くなり、夜更けまで何ごとか熱心に語り続けている姿がしょっちゅう見受けられるようになりました。

しかしこの二人の間には、傍らにいる者の眉を顰めさせるような「浮ついた」ものは微塵もありませんでした。お二人の交流は、ただひたすら何事かについて語り合うという、言ってみれば「書生っぽい」「本を読むような調子の」交流であり、互いの心と心の間には交わされた清いそれだったということは、この私が証言しておくべき義務でしょう。いつの間にか私には、お二人が熱心に何か語り合い、時には激しく言い争いさえしているのを見かけることがごく自然に感じられ、むしろそれが毎日の楽しみとさえなっていたのです。そのうちに奥様のお心もほぐれ、次第しだいに若い二人の仲をお受け容れになるゆとりも生まれてきたようでした。ラスコーリニコフさんが真面目に大学に通い、うちに帰ってから一所懸命に勉強されていることは明らかでしたし、ナターリヤお嬢様も相変わらず病弱という点は変わりありませんでしたが、今までになく澁刺とした表情をお見せになることも多く、奥様としてもこのような若い二人の奇妙な「婚約」にただ反対し続ける理由もないと思直されたようでした。それに何よりもまず奥様自身が、あの通り身持ちの堅い一方で、いつも何かを夢見ている、その夢の中に溶けて消え入りたいというようなお方です。心の内には依然どこか寂然としな残しつつも、一年が経つうちに、奥様はラスコーリニコフさんをナターリヤお嬢様の「婿殿」として認められるようになってゆきました。

D. 一本の「棘」、修道院

若い二人の間では、一体どのようなことが話し合われていたのでしょうか。この点については、当然のことながら、私はその内容にまで立ち入る立場にはありませんでした。しかし一つだけ私の耳に今も強く残っているのは、しばしば修道院入りの希望を訴えておいでのナターリヤお嬢様のあのか細いお声です。これは、ラスコーリニコフさんが下宿なさるずっと前から、お嬢様が折に触れて奥様やこの私などにも打ち明けられていたご希望で、その都度私たちを戸惑わせ、悲しい思いに突き落としていたものですから、この話題に限っては、居間を通りがかりに小耳にはさんだだけでも、私にはすぐにそれと分かりました。お嬢様は、今度はラスコーリニコフさんに対して、この希望をとりわけ熱心に訴えられるようになったのです。ご存知の通り、普通の家庭からその子弟が修道院に入るには、それなりの然るべき「ひき」とか「先だつもの」が必要ですし、殊にナターリヤ様の場合は余りにもお身体が弱く、とても修道院での生活に耐えられないことは明らかでした。それでもお嬢様はお望みをお捨てにならず、ラスコーリニコフさんに対しても、機会があるとそのお話を持ち出されたのです。ある時など、お嬢様は涙ながらに訴えておいでで、ラスコーリニコフさんの顔は困惑で歪んでいました。誰だって、自分の婚約者が涙まで流しながら、この世を捨てて修道院に行ってしまうなど訴えたら、戸惑ってしまいます。立場というものがなくなってしまいます。もちろんラスコーリニコフさんも、お嬢様が自分のことをお嫌いになってそんなことを言い出したのではないことは、十分に承知していたはずです。「修道院」が、お嬢様の恋の駆け引きの材料に使われたとも思えません。お嬢様は、この点について本気だったのです。またそれだからこそ一層ラスコーリニコフさんにとって、この問題は扱い難いものとなっていたことでしょう。それに何と言ってもラスコーリニコフさんには、将来を囑望されてペテルブルクに出てきた法学部の秀才という一面もおありだったはずです。この時あの方が泣きじゃくるナターリヤお嬢様を、どのように宥め落ち着かせたかは知りません。しかしこの修道院入りの問題は、後でお話する乞食への喜捨の問題と共に、一年前のお嬢様の死に至るまで、若い二人の間に突き刺さった一本の「棘」として、厄介な未解決の問題のままに残されたのではないのでしょうか。

E. 「おとぎの国」

修道院入りを夢見るナターリヤお嬢様は、驚くほど謙虚でへりくだった性格をお持ちの方でした。この私のような召使に対しても、決して高みからの物言いなどなさいませんでした。外を通る乞食が目に入ると、お嬢様は必ず呼び止め、家にある食べ物と許される限りの小銭を恵み、それでもご自分の出来ることの少なさ

を嘆かれ、ご自分の過分な幸せと罪深さについて神様にお赦しを乞うような方でした。つまりナターリヤ様とは「ユロージヴァヤ(宗教的痴愚)」とでも言うべき方で、この地上のことよりも、天上の神様の方へとより強く心が向いてしまう種類の方だったのです。この傾向はお父様の死を切っ掛けとして強まり、その上ご自分の病弱さを(そして恐らくはご容姿のことなども)思いなされるにつけて、一層強まっていったのではないのでしょうか。

改めてこのお嬢様の「ご容姿」ということで申し上げますが、お嬢様は世間の基準から言うと、正直のところ決して「見目麗しい」という訳にはゆきませんでした。またお嬢様のことをよく知らない人たちからは、この「ご容姿」のことも含めてでしょう、「風変りなお人だ」とよく評されていました。しかしお嬢様のことをよく知れば知るほど、人はその病的とさえ言えるほどに表情に富んだお顔の背後に、類まれな美しい魂が潜んでいることが分かってくるはずです。神様はこの天使のような美しい魂を世の塵から守ろうとして、お嬢様にあの絶えざる「病」と「ご容姿」を、つまりは「風変りさ」をお与えになったに違いない——私は一人でこう納得していたものでした。

ひたすら神様のこと、修道院のことを思い続けられ、乞食たちに喜捨をなさるお嬢様と、やはりその心は地上を遠く離れ、いつもどこか夢の国を憧れてさ迷い続けておいでの奥様・・・私がお仕えするお宅とは、このように世間離れをした奥様とお嬢様とが創る「おとぎの国」、「幼な心」の育まれるオアシスのような一面がありました。そして私はといえば、この雰囲気が好きだったのです。一步踏み違えば永遠の地獄にのたうち回るしかないペテルブルクの街で、私はこのようなお宅に巡り合えたことにホッと、その幸運を噛み締めたものでした。周囲にはこのお二人のことを指して「風変りな母娘だ」「いいご身分で、いい気なものだ」などと陰口をささやく人たちもおりました。しかしそれは、このお二人の心映えの純真さと心根の優しさに目が向かない、その人たち自身の不幸を言い表わす言葉に過ぎないのではないのでしょうか。

しかし、とかく誤解されやすいこのお宅の雰囲気を、曇りのない目で素直に見抜いて下さる方も中にはおいででした。そのお一人が、最近ではラズーミヒンさんなのです。御当人を前にして言うのも変なことですが、ラズーミヒンさんがうちにおいでの時は、お嬢様亡き後この家に立ち込める悲しみの中に、しばし晴れ間がのぞき笑顔が戻る時でございました。また改めて今思いますに、一面では誇り高くて気難しく人見知りの激しいあのラスコーリニコフさんも、うちのこの世離れした雰囲気がすぐに呑み込めて、それをあの人なりの仕方で気に入ってくれていたのだらうと思います。私には今、自分自身を重ねて、その辺の事情が手に取るようにわかる気がいたします。またここから見ますと、ラズーミヒンさんとラスコーリニコフさんとが無二の親友であるということも、私なりに納得が出来

るような気がいたします。

F. 狂い始めた歯車

「歯車」が狂い始めたのは、ナターリヤお嬢様の死からでした。それは今から一年前のこと、ラスコーリニコフさんとの婚約からほぼ二年が経った時のことです。この世を捨てて修道院へどころか、腸チフスにかかったナターリヤお嬢様は、突然意を決したかのように、アツという間にあの世に走り去っておしまいになったのです。後に残された私たち三人の絶望と悲しみをご想像下さい・・・

しばらくして奥様は、余りにもつらく悲しい思い出の残る五つ辻街の住まいを去る決心をなさいました。奥様の決心を前にして、ラスコーリニコフさんはこの時、お嬢様との思い出の場を去り難かったにせよ、亡きお嬢様の「元婚約者」という気まずい立場に気づいて、何らかの行動をとってもよかったはずなのですが、余りにも深い絶望と無力感のためか、それとも何か他に理由があったのか、この引っ越し話に対して何も言い出すわけでもなく、また人の良い奥様もこの時点では、そこまで微妙なことを敢えて口にお出しになることもありませんでした。そんなわけで、あの敏感で誇り高かったはずのラスコーリニコフさんが、この引っ越しにあたっては、結局ノコノコとわたしたちに付き随ってくることになってしまいました。奇妙なことでした。奥様も、さすがにこれを機に、あの人との間に少し距離を置こうとなさいました。引っ越しを機会として、家に入出りを始めたチェバーロフといういかさま師の口車に乗って、それまでの百二十ルーブリの借金について正式な証文が作成され、ラスコーリニコフさんはそれにサインを求められました。またあの人の部屋もこれ以降、奥様や私のいるところから一番離れたところにあるということで、屋根裏部屋があてがわれました。ところがあの人は、そんなことは全く気になど留めはしないかのように、深い物思いに耽り続けているのでした。「歯車」は軋み、あの人は大きく変わってしまったのです。

G. 悪魔風

「歯車」はどんどん調子がおかしくなってゆきました。ラスコーリニコフさんは、あてがわれた船室のような屋根裏部屋に閉じ籠りがちになり、大学にも行かなくなってしまいました。その代わりに、机に向かって何か夢中で書き物をするようになったのです。ところが数か月がたち、その書き物が終わると、あの人が机に向かう姿もパタッと見られなくなってしまいました。特にあの忌むしい殺人事件を起こすまでの半年ほどは、放心状態のような日々が続き、あの人は唯一の生活の資であるはずのアルバイトさえ投げ出してしまったようでした。身なりにも無

頓着になり、着るものはどんどん擦り切れて穴が開き、ボロボロの状態になってゆきました。ところがあの人は、そんなことにはおかまいなし。これが自分の「仕事」だと言って、ただただ物思いに耽っているのです。そして最後の数カ月は、下宿代さえ入れなくなっていました。奥様も最近ではとうとう私に食事を出すことをお禁じになり、チェバーロフに唆されて、警察に債務不履行の訴えまでお出しになってしまいました。私には、まだこのラスコーリニコフさんの変わりようが信じられず、またナターリヤお嬢様が存命中のあの人の善良さが忘れられなくて、つつい奥様に内緒で、あの人にパンの切れ端やシチューの残りなどを運んでいってあげたものでした。これに対してあの人は、べつに喜ぶわけでもなく、かといってこの私を追い払おうというわけでもなく、無気力になすがままに任せているのです。心、ここにあらず。あの人の目は、どこか遠くを見つめて彷徨い続けているかのようでした。屋根裏部屋からあの人は、一体何を見つめていたのでしょうか・・・

「歯車が軋んだ」、そして「調子がおかしくなった」と申し上げましたが、そう、私はあの人が悪魔に心を占領されてしまったとしか思えません。天使のようなナターリヤ様がお亡くなりになって、それを機にこの家からは神様の庇護も消え、とって代わって忌わしい悪魔が住み着いてしまったに違いないのです。奥様はあのチェバーロフなどというやくざ者の出入りをお許しになるし、ラスコーリニコフさんの血の中にもきつと何か恐ろしい霊が取り憑いて、ナターリヤお嬢様が消えてポツカリと空いた心の空洞を占領してしまったのでしょうか。私の田舎の父と母とは、このようなことをよく「悪魔風が吹く」と申しておりました。人間の心が神様から最も遠く離れてしまった時、悪魔風が吹き寄せる。すると人間の凶暴な血が騒ぎ始め、歯車が全て狂い始める、と言うのです。

H. 吉報

ラズーミヒンさんが、今、素晴らしい知らせをもたらしてくれました！

前回私は、人間の心に吹き込む「悪魔風」のことをお話しましたが、お嬢様がお亡くなりになって悪魔が忍び込む前、大学二年生の頃、ラスコーリニコフさんの心には確かに「天使」が住んでいたことを、ラズーミヒンが裁判に向けた奔走の末に証明して下さったのです。ラズーミヒンさんによりますと、十三歳の頃から病気のお父さんの面倒を看続け、やがてはご自分も胸の病気にかかって志の半ばで倒れておしまいになった大学のお友達を、ラスコーリニコフさんは黙って一人で支えてあげ続けたばかりか、そのお友達が死んでしまわれると、今度は代わってそのお父さんの面倒を引き受け、最後にはそのお葬式まで出してあげていたというのです。この驚くべき嬉しい知らせを、ラズーミヒンさんは間もなく法廷で

証言なさるそうです。天の神様ばかりか、皇帝様のお裁きの場においでの方々も、このほゞ一年にわたるラスコーリニコフさんの隠れた善行のことをお知りになれば、お気持ちをずっと和らげて下さるに違いありません。

この知らせは、様々なことに新しい光を投げ掛けてくれるような気がいたします。と言うのも今思えば、お友達のお父さんの死とナターリヤお嬢様の死とは、殆ど時を置かずして起こったこととなります。ラスコーリニコフさんの歯車の狂い始めは、お嬢様の死ばかりではなかったのです。あの人は一年の間に、大学のお友達とそのお父さんお二人の死を看取り、その上更に婚約者であるナターリヤお嬢様の死とまで向き合わなければならなかったのです。あの人を襲った虚しさと悲しさ、そして絶望の深さは如何ばかりのものだったことでしょう！

I. 隠されていたこと

ラズーミヒンさんが明らかにして下さった事実から改めて今思い起こされ、納得させられることが次々と出てまいります。その一つが、色々と気になることがあったラスコーリニコフさんの二年目の生活のことです。今日はこのこととお話させていただきたいと思います。

うちに下宿してかほゞ一年くらいが経った頃でしょうか。あの人は急に家庭教師のアルバイトの数を増やし始め、家に帰る時間も遅くなり始めました。奥様やこの私に対しては言うまでもなく、ナターリヤお嬢様に対してさえ、このことについて本人は堅く口を閉ざしたまま何も言わないため、ハッキリとその理由は聞き出されないままでした。故郷のお母さんと妹さんが、とても苦勞をしてラスコーリニコフさんに仕送りをなさっていることは誰もが知っていましたから、きっとあの人は、お二人の負担を少しでも減らしてあげるために、このようにアルバイトを増やしたのだらうと私たちは勝手に推し量っていました。ところが、このことと同時に、あの人は時おり奥様に借金の申し出も始められたのです。決して一度に多くの額ではなかったようですが、それまでの一年、こんなことは決してなかったことで、不審に思いつつも、人の良い奥様は拒むことはなさらず、その都度用立ててお上げになりました。先にもお話をしましたが、それでもその金額はいつの間にか百二十ルーブリにもなっていたのです。

それにこの頃からのことです。あの人が大学からの帰り道でニコライエフスキイ橋の上に立ち止まり、遠くを見やりながら物思いに耽っている姿が目撃されるようになりました。私もそうでしたが、ラズーミヒンさんもその目撃者だったそうです。——このように気掛かりなことも少なくはなかったのですが、全体としてあの頃の寡黙になったラスコーリニコフさんは、むしろ内から何か触れ難い力が溢れ出て来るようで凛々しく、私達に不吉な忌まわしい印象を与えることは

決してありませんでした。私はこのようなラスコーリニコフさんを、むしろ好もしく思っておりました。お嬢様も奥様も、私と同じように感じておいでだったのではないのでしょうか。

このようなことの背後に、ラズーミヒンさんが知らせて下さったお話、大学のお友達父子のお世話をしているラスコーリニコフさんを重ねて見れば、なるほどと多くのことに合点がゆきます！ キリスト様は、施しをする時には右手のしていることを左手に知らせるな、とおっしゃいました。またその一方で、隠れているもので現われ出ないものはない、とも言われておいでです。今度のラズーミヒンさんの証言で、ペテルブルクへ来てから二年目のあの人の生活の隠されていた部分の多くが、ようやく陽の光の下に明らかになったのです。様々なことに筋道が通り、キリスト様と共に、結局は人の心を信じるべきことを納得させられる時が来たのです。こんなに喜ばしい思いをするのは何時しかぶりのことでしょうか！

J. 「棘」、貧しき人々

最近明らかになったラスコーリニコフさんの隠れた善行は、あの人の奥ゆかしい心を明らかにしてくれ、私たちを喜ばせてくれました。しかし時間が経つにつれて、このことで私の心には新しい謎も芽生えてきたように思われます。

と申しますのも、このことは改めて私に、先にもお話をしたように、ナターリヤお嬢様が絶えず乞食たちに施しをなさっていたあの事実を思い起こさせるのです。お嬢様の乞食への喜捨と、ラスコーリニコフさんの隠れた善行—— 婚約者二人によって並行して別々になされたこれらのことは、何か関係があるのでしょうか？ あの人はナターリヤお嬢様と密かに陰で張り合おうとしていたのでしょうか？ 詳しい事情は分かりようがありません。しかしどう考えても、ラスコーリニコフさんの大学二年目の一年間とは、私にはナターリヤお嬢様との隠れた「施し合戦」のようなものになっていたように思われるのです。あの人の真意は何処にあったのでしょうか？ 私はここに大きな謎を感じます。今日は、ラズーミヒンさんの助けもお借りしてですが、このことについてお話をさせて頂きたいと思います。

生前のお嬢様は、乞食たちに食べ物や小銭を分け与えた後で、いつも泣いておいででした。私がこんなことをしたところで何もならない。世間にはあの人たちよりも遥かに不幸な人たちがもつともつと多い。乞食や不幸な人たちはペテルブルクばかりか、世界中に満ちあふれている。その人たちが一人残らず満ち足りて幸せにならない限り、こちらにも決して心の平安は与えられない。こうして私がしていることなど、ただ私にとっての気休めでしかない。私は偽善者なのだ。一体どうしたらいいのだろうか？ 一層のこと全てを捨てて修道院に入ってしまいたい・・・お嬢様はこのことを奥様に絶えず訴えておいででした。でも病弱なお嬢様を抱え、その面倒

をご自分の死後まで確かなものとしておかねばならない奥様にとっては、お嬢様の天使のような心に同情して、財産の全てを目の前の乞食に分け与えてしまい、イザお嬢様と手を取り合って修道院へ！というわけにはまいりません。また、たとえそうしたところで、お嬢様が問題とされていることが、全て解決されてしまうわけでもないことは明らかです。奥様に出来ることはと言えば、ただ溜め息をついて部屋を出てお行きになることだけでした。このお嬢様の「乞食への施し」から始まり、「修道院入り」の希望に至る問題は、先にも申しあげましたように、平和なこのお宅に突き刺さって抜けない小さな一本の「棘」のようなものだったと言えます。

ここで私のごとき召使が口にすることは恐縮ですが、ラズーミヒンさんも仰るように、この棘は一見小さなものようですが、実はこの世に生きる限り、誰の心にも何らかの形で突き刺さっている棘であり、触れれば体の芯まで刺し貫くような痛みを伴う棘だとも言えるのではないのでしょうか？ センナヤの広場をご覧ください。現に今も、この壮麗なペテルブルクの街には無数の乞食と貧民が蠢いているではありませんか。これを一体誰が、どのように解決出来るというのでしょうか？ この私だって一歩間違えば、いつこの群れの一人に加わらないとも限らないのです。この群れを思い出させるために、神様は私たちの心にこの一本の棘を置かれたのではないのでしょうか？ 罪深い私たちは、この神様のご配慮を忘れ、自分のことだけを考えて生きている毎日なのです。

しかし神様を忘れることのないお嬢様の純な心の目は、この群れを無視すること、この世にある「貧しき人々」の事を見て見ぬふりをして通り過ぎることなどお出来にならなかったのです。この問題は、お嬢様にとっての一本の棘であり、またその棘を忘れられないお嬢様自身が、この恵まれたお宅にとっての一本の棘となりました。そしてこの棘は新たに、ペテルブルクの街に出て来たエリート大学生のラスコーリニコフさんにも、お嬢様を介して突き刺さったのだと言えはしないのでしょうか？ ラズーミヒンさんもラスコーリニコフさんと、この「貧しき人々」の問題について、しばしば大学で語り合ったのだそうです。

先にも申しあげましたが、それまでの奥様に代わって、お嬢様はラスコーリニコフさんを相手に、この問題をよく夜更けまで議論しておいででした。そして遂にはお嬢様が涙を流しながら修道院入りを訴えられ、ラスコーリニコフさんが真っ青な顔をして足早に自分の部屋へ駆け戻って行くところも見かけられました。このたび明らかにされたラスコーリニコフさんの隠れた善行、これもあの人ナターリヤお嬢様に突きつけられた一本の棘を、あの人自身の立場で真摯に受け止め、格闘していた一つの証だったと考えられるような気がいたします。誇り高いあの方は、お嬢様とは別のところで、貧しいお友達父子のお世話をしながら、このペテルブルクの街に蠢く乞食たち、「貧しき人々」の問題に思いを巡らせていたのではないのでしょうか？ 大学からの帰り道、ニコライエフスキイ橋の上から遠くを見やりながら物思い

に耽っている姿、私ばかりかラズーミヒンさんも、大学への行き帰りに一度ならずその姿を見かけられたのだそうですが、これは他ならぬこの問題について物思いに耽るラスコーリニコフさんだったのではないのでしょうか？・・・



「善きサマリア人」(1890) Vincent van ゴッホ (1853-90)

K. 「善きサマリア人」

大学のお友達への援助から、後に残されたそのお父さんの葬式に至るまでのお世話。これに続くナターリヤお嬢様の死 —— ペテルブルクに暮らし始めて二年目のわずか一年間で、ラスコーリニコフさんは「貧しき人々」の問題を巡って、これら三人の方たちとの間に深い交流を持ち、しかもその方たちを次から次へと立て続けにあの世へとお送りすることになってしまいました。激しい愛の実践の後に、一人取り残されてしまった心の空白 —— この方たちが次々とお亡くなりになって、後に残された「棘」は、ラスコーリニコフさんの心にどのように働きかけて行ったのでしょうか？

また、これは間もなくうちの奥様が法廷でお話なさるはずのことですが、お嬢様のお亡くなりになる直前のことでした。ラスコーリニコフさんは、ある夜近所で起こった火事騒ぎの時、既に燃え盛る建物の中に皆がアッと言う間もなく飛び込んで行って、ご自分はたいそうな火傷を負いながらも、炎の中から二人の子供を救い出すという勲功(いさおし)もなさっています。あの人は、目の前にある不幸とか不義・不正に対して、自分に関係ないとそのまま黙って通り過ぎることの出来ない種類の人なのです。ラズーミヒンさんは、このようなラスコーリニコフさんを「実際的精神」の持ち主だと言われます。私の父や母は、このような人のことを「善きサマリア人」と呼んでいました。

死にゆく命と救い出される命。そのいずれにも、ラスコーリニコフさんは優しい心を持った天使、つまり「善きサマリア人」として真正面から臨んでいたのです。このような人が、その後の一年間で、二人もの女性[金貸しの老婆アリョーナと、そこに偶然帰宅した妹リザベータ]の頭を斧で叩き割る殺人鬼・悪魔に変身してしまいました。私には今もお、このラスコーリニコフさんの変貌がどうしても理解出来ません。あの「善きサマリア人」の心に、一体どのような悪魔が忍び込んだのでしょうか？ その悪魔とは、神様が私たちの心にお忍ばせになったあの「棘」と、一体どう結びつくものだったのでしょうか？ 色々なことが明らかになると共に、私の内では謎も大きくなってゆくのです。

L. 闇に光る「灯」

私が語りたいことは、これではほぼ全てを語り尽くしました。始めにも申し上げましたが、予審判事のポルフィーリイ様は、この事件について、私が自分自身の立場から何を見て何を感じたのかを、そのまま自由に語って欲しい。その際遠慮は禁物だ、と仰って下さいました。ポルフィーリイ様によれば、今度の事件は大きな謎であり、ラスコーリニコフさんただ一人の罪と罰の問題のみではなく、ここには今の時代全体が複雑に映し出されている、いわば鏡のようなものだそうです。このような場合、

その当事者ばかりでなく、周囲にいた一人ひとりの人間が見たり感じたりしたままの証言も集められ、それらが一つになって、その後で初めてそれまで誰もが気づかなかった、より大きな真実が全体の姿を現わすものだそうです。そしてその際に大事なことは、一人ひとりが自らの立場から言葉を語り、謎はそのまま謎として留め、やがて真実が自らを明らかにするまでジッと時を待つべきだと言われるのです。私にはこのポルフィーリィ様が言われることを、頭では十分に理解出来ませんが、真実に触れたものであることは心に感じられます。今度の事件で、悲しみと恐ろしさに打ちひしがれている今の私にとっては、ポルフィーリィ様のお言葉が感じさせて下さる真実は、その熱意と誠意と共に、言ってみれば闇の中に光る一つの「灯」のようなものです。これに励まされ、またラズーミヒンさんにも助けられつつ、ずいぶん生意気なことまでお話ししてしまいました。でも、ポルフィーリィ様もラズーミヒンさんも、それでいいと仰って下さいます。そしてこの後は、皇帝様と天の神様のお裁きにお任せするのだと。

M. 再生、もう一つの「灯」

闇の中に光る「灯」・・・最後にもう一つだけ述べさせていたいただきたいことがあります。それは、あのソーニャさんのことでございます。ソーニャさんを「黄色い鑑札」を持つ街の女だと言って後ろ指を指す人もいます。しかし何度も申し上げましたが、このペテルブルクに生きている限りは誰だって、いつ何時どのような酷い境遇に堕ちてしまわないとも限らないのです。聞く所によると、ソーニャさんは貧しい家族、それも飲んだくれの父親のためばかりか、鬼のような義理の母やその連れ子たちのために自らを犠牲にし、身を売ったのだというではありませんか。この私も父と母の亡き後、ひとり無一物でこの街に投げ出され、一步間違えばあのソーニャさんと全く同じ、それどころかもっと悲惨な境遇に落ち込みかねない目に遭って参りました。その末に、幸運にも今の奥様と亡きお嬢様とその心根の優しさにお会い出来て、私はここに人一倍幸せな召使としての生活を恵まれております。そのような体験の中から、この世に生きてゆく上で、私が何よりも大切なものとして心に留めるに至ったものとは、人の心根の優しさ、思い遣りの心なのです。そして私を見るソーニャさんとは、ナターリヤお嬢様やラスコーリニコフさんと同じく、自分はさておいても隣人の不幸や悲しみを黙って見過ごすことの出来ない「善きサマリア人」であり、黄色い鑑札どころか、心根の優しさという、人間にとって一番大切な人生の通行証をお持ちの方なのです。

私は、ソーニャさんが初めてうちのラスコーリニコフさんの許を訪ねておいでになった時のことを、今もまざまざと覚えています。伏し目勝ちにおずおずと、あの方は敷居を超えてラスコーリニコフさんの屋根裏部屋に入ってゆかれました。

ソーニャさんの佇まい、そのへりくだった物腰の隅々から伺われる謙虚さと優しさ。この瞬間、私はハッとして目を疑いました。亡くなられたナターリヤお嬢様がそこに立っただけのような気がしたのです。神様がラスコーリニコフさんに、ナターリヤお嬢様を再びお送りになって下さったのかも知れない、私がこの時感じたのはこのことでした。この時ラスコーリニコフさんは恐ろしい殺人を犯した直後であり、しかもなんとソーニャさんの信仰の友であり、私達の仲間でもあったリザベータの頭までも叩き割ってしまった直後だったのです。しかしその事実を知った今こそ、私は改めてあの時に感じたことが正しかったと思います。—— この世を捨てて修道院入りばかり夢見ておいでだったナターリヤお嬢様、そのお嬢様が、この世の修羅の只中で生きる力と優しさを携えたソーニャさんの内に新たに生まれ変わって、再びラスコーリニコフさんと生を共にしようとなさっておいでになる!

このペテルブルクには、ラスコーリニコフさんのような天使をも殺人鬼に変えてしまう、恐ろしい悪魔が住んでいることは疑いありません。私にはその悪魔が誰か、そして何かは分かりません。でもそれと共に、この世にはその悪魔をも再び天使に変える力も確かに存在していることを、私は信じます。それが隣り人に対する「心根の優しさ」という、神様がキリスト様を通して私たちにお与え下さった本当の財産であり力であり、闇の中に光る「灯」ではないでしょうか。「悪魔風が吹くということは」、と私の父母はよく幼い私に申しておりました。「お前が隣り人を忘れるということなのだよ」。

ラスコーリニコフさんは、ナターリヤお嬢様から突きつけられた「貧しき人々」という「棘」を、余りにも真面目に余りにも性急に抜き去ろうとして、どこかの迷路にはまり込んで悪魔に心を預けてしまったのでしょうか。しかしこのラスコーリニコフさんにもう一度、天使の心を取り戻させようと、神様とキリスト様はナターリヤお嬢様に代わって、ソーニャさんを新しい「隣り人」としてお送り下さったに違いありません。ソーニャさんは、その神様とキリスト様に根ざした「心根の優しさ」をただ一つの「灯」として、リザベータの命さえ奪ったラスコーリニコフさんを導き、あの人がある地獄の闇から再びこの世界に連れ戻し、場合によってはあの人を「貧しき人々」にとっての「新しい太陽」として(これはポルフィーリイ様の言葉です)輝き出させて下さるかも知れません。私には今、その奇跡が確かなものとして感じられます。それは、ナターリヤお嬢様から、そしてリザベータ(★)から、ソーニャさんへと託された切なる願いでもありましょう。

(了)

★金貸しの老婆アリョーナと共に、ラスコーリニコフがその頭を斧で叩き割ってしまった老婆の妹リザベータ。この女性はソーニャに新約聖書をもたらし、共に信仰について語り合った友であり、

ラスコーリニコフの罪と罰のドラマを陰で導く大きな存在です。本稿では専らナターリヤに光を当て、リザベータは背景に後退させていますが、彼女については『罪と罰』論の第六章と、「研究会便り(19)(20)」で取り上げていますので、関心のある方はこれらをお読み下さい。

★『罪と罰』論に至る様々なデッサンを、以下に時系列的に整理しておきます。

1. 1997年9月
「ラスコーリニコフ、〈個人史への視点〉」
 (「ドストエーフスキイの会」・第34回例会での発表)
2. 1997年11月
「法学部中退ラスコーリニコフが見た三つの夢」
 (雑誌『情況』11月号に発表した論文)
3. 1998年3月
「ラスコーリニコフの婚約者像をめぐって」
 (文部省科学研究費補助金による共同研究「ドストエーフスキイと現代社会」・研究会で行った発表)
4. 1999年3月
「『罪と罰』、隠された女神たち」、— ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって」
 (3の発表を論文化して「スラブ学論叢」第3号に掲載したもの)
5. 1999年3月
「異聞・『罪と罰』 — 召使ナスターシャの回想」
 (1の講演を原稿化し、同会出版の「ドストエーフスキイ広場」第8号に掲載したもの)
6. 2001年2月
「『罪と罰』、隠された女神たち — ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって —」
 (4の論文を、共同研究の報告書『論集ドストエーフスキイと現代』(多賀出版)に掲載したもの)
7. 2003年4-6月
「文学の中の家族 — ラスコーリニコフが属した三つの家族 —」
 (雑誌『家族ケア』(家族ケア研究所)に三回にわたり掲載した論文)
8. 2007年12月
「『罪と罰』における復活 — ドストエーフスキイと聖書 —」
 (河合文化教育研究所から出版した『罪と罰』論)

次回ドストエフスキイ研究会便り(26)について

★親鸞仏教センターに於ける研究発表を契機として(2017、その記録は「研究会便り」の(19)と(20)に掲載しました)、その後私は、同センターの若い研究員の方たちと「親鸞とドストエフスキイ」というテーマで研究会を続けさせて頂いてきました。

★この研究会で私は、主に『カラマーゾフの兄弟』を取りあげ、親鸞の浄土教に対し、ドストエフスキイのキリスト教に於いては、何が根本的な「信」の問題として存在するのか、様々な角度から問題提起をさせて頂いています。その際、具体的にはイワンとスメルジャコフ、またゾシマ長老とアリョーシャに焦点を絞り、この作家が遺作に於いて如何に「信と不信」「肯定と否定」の問題を扱うに至ったか、考察を試みているのですが、次回の「研究会便り」には、2020年3月に「アリョーシャから見たゾシマ長老の信」という題目でした発表を、文章化して提示したいと思います。

★アリョーシャとゾシマ長老と言えば、ドストエフスキイがソーニャやムイシュキン公爵と共に、正面から描いた「肯定的信」の人として余りにも有名です。しかしそもそもドストエフスキイに於いて、彼らの「信」とは何であるのか、改めてテキストを丁寧に追いつつ、じっくり検討してみようと思っています。容易には終わりそうにない作業ですが、「研究会便り」の新しいシリーズとして、間隔は今までより空きますが、次回から順次掲載をしてゆく予定です。